

文華秀麗集に関する一考察

「艶情」という類題をめぐって

梅野きみ子

一

文華秀麗集に関しては、最近、松浦友久氏（注1）が、成立・名称・作者と作品・編集方針・文学性にわたる広い見地から考察しておられる。氏以前にも、松浦貞俊氏（注2）、小島憲之博士（注3）をはじめとして、我が国の勅撰三詩集を論じる人々により、何らかの形で触れられてきた。

本稿では、文華秀麗集にはじめて見える「艶情」という類題に焦点をあてながら、文華秀麗集の一特性を考えてみたい。そして、延いては、「艶」という審美感が日本文学にどのように反映したかという一過程の考察の基礎にしたいと思う。

二

文華秀麗集は、その序に「並皆以類題叙、取其易聞」とあるように、類題別に配列されている。これは、懐風藻の「略以時代相次、不下以尊卑等級」や、凌云集の「無言存亡、一依爵次」という方法とは、形の上でも大きな変化である。

そこでまず、文華秀麗集における類題が、これと同じく類題別に配列してあつてしかも日本漢詩文と密接な関係にあるところの、文選、及び、文選に準じた芸文類聚における類題と、どのように対応するかを表示してみる。

（ ）内は詩題を示す。

文華秀麗集			文選賦類題			文選詩類題			芸文類聚人部・楽部類題		
上	通番号	類題	遊	遊	遊	祖	公	遊	遊	遊	遊
3	2	1	14	4	10	賤	謙	覽	覽	覽	人部
別	集	覽	詩	類	類	類	類	類	類	類	類

下	中						上
11	10	9	8	7	6	5	4
雜	哀	梵	樂	艷	述	詠	贈
詠	傷	門	府	情	懷	史	答
48	12	10	9	11	5	4	13
				情			
雜詩・雜歌	哀傷		樂府	(情詩)	詠懷	詠史	贈答
	哀傷		樂府	閨情入部 怨入部 愁入部			贈答入部

ただし、文選賦の類題「情」は、類題の形式においては似ているが、内容においては、文華秀麗集の「艷情」の詩に似ていない場合である。(情詩)は、詩の題名で類題形式としては整えられていないが、内容が「艷情」の詩と接近している場合を示す。ここで、1・4・8・10の類題は、文選、芸文類聚ともに同一であるが、5の詠史は、文選とだけ同じである。2・3・6・11についても、文選の中にそれぞれ類似の類題がある。

右の表により、文華秀麗集の類題は、全般的に見て、芸文類聚のそれよりも、むしろ、文選のそれにならつたものと見てよからう。つまり、文華秀麗集の編者等は、まず、漢詩集のオソソリテイである文選の「凡次」文之体、各以定聚、詩賦体既不、又以類分、類分之中、各

る類題が見当らないばかりか、文選以後でも、「艷情」というパターンが、オソソドツクスな分類の概念になつていない。しかし、六朝の艷詩流行(注6)を契機として、艷詩中の、美人を主体とした恋情を委曲を尽して表現した情詩を総称して、艷情詩といつたとする可能性は認められよう。

我が国でも、国訳漢文大成 文学部 第十二卷 著唐小説の国訳唐代小説中に「艷情類」という小見出しで、「霍小玉伝」や「李娃伝」等の伝奇小説が収められている。この「艷情類」の小説について、編者塩谷温博士は、佳人才子の風流韻事を録したるものなり。事既に奇にして伝ふべく、文亦妙にして誦すべく、実に唐代小説の精神なり。

と解説しておられる。しかし、これらの例は、文華秀麗集の時代よりもはるかに後の例である。結局「艷情」という類題は、文華秀麗集においてはじめて現われたものということになる。このことは、日本文学に現われる「艷」の一面を考察する上に注目すべきことではなからうか。

文華秀麗集の類題「艷情」を考察するにあたって、中

以「時代相次」という基本方針を主として参考にして、類題をきめたのであろう。

ところが、7「艷情」と9「梵門」は、文選にも該当する類題が見られず、文華秀麗集になつてはじめて現われる。

まず、9「梵門」については、平安朝に入つて仏教思想が横益するようになったこと(注4)、及び、「当時」仏教思想の盛行の原因のほかに、唐詩集の中かなりの地位を占める仏教関係の詩の所収に準じて生れた(注5)こと等に原因が求められよう。そしてこのことは、後の我が国の勅撰和歌集にあらわれる釈教歌への一過程としても説明されよう。

つぎに、7「艷情」の類題については、文選に該当する国漢詩文中の「艷情」の用例を、もう少し詳しく個々の例にあたって検討してみよう。

中国漢詩文中に「艷情」の用例は、詩学上の類題としては見えないが、詩句中の一般用語としてはわずかに見える。まず、小島博士が最初に指摘された(注7)、初唐四傑の一人駱賓王の「臨海集」代郭氏答盧照鄰詩が注目される。この詩は、見捨てられた女性、郭氏が、去臘照鄰を恋する思いを、作者駱賓王が代弁した詩である。この詩趣は、第四節で述べる如く、文華秀麗集の艷情部の詩と内容が類似しており、しかも、この例は詩題中に「艷情」とある点で、文華秀麗集の「艷情」を考察する上に最も的確な例と見做される。この例に匹敵する程の「艷情」の用例は、私の調査では、全唐詩中一例も見つ

けることができなかつた。以下、駱賓王の右の詩、及び文華秀麗集艷情部の詩と類似の内容の詩を、便宜上、「艷情の詩」と呼ぶことにする。

駱臨海集を見ると、右の詩の次に、「艷情」を略した形で、「代女道士王靈妃贈道士李榮」詩が並んでいる。女道士といえは、白楽天が好んでとり入れた遊女のような女性である。ここでは、女道士王靈妃が、老子の注を

も書いた実在の人物李榮を思ひ気持を、作者・駱賓王が代弁している。前の詩と同じく、「艶情の詩」であり、「艶情、代女道士王靈妃贈道士李榮」と題すべきところである。また、その逆、つまり、前の詩題は、後の例のごとく、「代郭氏答盧照鄰」とあるだけでも、充分題名として成立する。なぜなら、これと類似の題、「代一贈一」または「為一贈一」という形式の詩は、文選・玉台新詠集を通じて、「艶情の詩」の一パターンとなつてゐるからである。たとへば、文選には、陸機・陸雲の「為顧彦先贈婦」往返詩（陸機・陸雲が、顧彦先の代作をしてその妻に贈つた詩、及び、妻が夫に答えた詩の代作）の妻が夫に答えた返詩があげられる。玉台新詠集には、右の詩以外に、陸機の「為周夫人贈車騎一首」（卷三）とか、姚翻の「代陳慶之美人為詠」（卷十）とか、王環の「代西豊侯美人一首」（卷十）等がある。そして、第四節で述べる文選第一群の大部分を占める「艶情の詩」は、題名こそ右の形式にしたがつていなくとも、殆んど男性の代作である。

以上の考察により、駱賓王の詩題に「艶情」がないとしても、それによつて大勢に変化を与えることはあり得ず、したがつて、この「艶情」という語は、あつてもな

くてもよいような落着きのない語句ということが理解される。そして、「艶なる女性郭氏について」離別された夫を恋する気持を、駱賓王が代つて述べたといふのであるから、ここに用いられている「艶情」の意味内容には、かなり類題意識がはたらいてゐるとも見なされよう。ということとは、以下に述べる詩句中の一般用語に関する「艶情」（注8）の用法に比し、駱賓王のこの「艶情」は、類題意識がはたらいてゐるといふ点で、詩学意識を濃厚に持つてゐたということが理解される。

なお、詩文を対象とした「詩学上の艶」（注9）の範疇に入るべき「艶情」の用例は、明末から清代以降にまで時代が下ると、用例としては現われてくる（注10）。しかし、それらすべてが、類題意識・詩学意識をもつようになり、中国文学界においても、「艶情」という類題意識が一般の間で発生するようになったかといふ点になると疑問である。

たとへば、おそらく明末頃の人と思われる呉之器（字は）のあらわした駱丞列伝（注12）に、「帝京・晦昔、特為擲揚。靈妃・艶情、尤極凄靡」とみえるのは、「帝京」は「上吏部侍郎帝京篇并序」（駱臨海集卷一）を、「晦昔」は「晦昔篇」（同、卷五）を、「靈妃」は「代女

道士王靈妃贈道士李榮」（同、卷四）を、「艶情」は「艶情代郭氏答盧照鄰」（同、卷四）を簡略化した表現と見なされる。もし、「靈妃」篇をも含めて、「艶情二篇、尤極凄靡」といつておれば、この「艶情」から類題意識を云々することが可能であるが、そうは言つていないところを見ると、ここからただちに類題意識を導き出すことは出来ない。

これと同様の用例として、清の陳熙晋の著わした駱臨海集箋注卷七「上兗州崔長史啓」の詩句「光浮衛玉」の注に、「衛玉、見艶情詩玉人注」とみえてゐる。これは、「衛玉」のことに關しては、「艶情代郭氏答盧照鄰」の詩句、「君住三仙守玉人」の「玉人」の注に見えるから記さない。

という断わり書きと見うけられる。明らかに、ここに見える陳熙晋の例は、単に、「艶情代郭氏答盧照鄰」の詩一篇だけを「艶情詩」と略称してゐるという事実を示すに止まる。また、このように略称したのは、原題に「艶情」とあるから、という理由で形式的な理由からにすぎない。つまり、さきに、駱臨海集に並んでゐる「艶情」を略した形の詩として引用した詩「代女道士王靈妃贈道士李榮」は、陳熙晋にあつては、「艶情詩」として取扱われ

てはいない。その点は、呉之器の場合でも全く同じである。したがつて、以上の二人には、特定の詩篇を略称した「艶情」という用例はみえるが、そこに類題意識は全然認められない。

以上をもつて、第二節に述べた概要が理解されよう。つまり、中国の詩には「艶情の詩」は存在するが、それらが類題として意識されることはなかつた。ただ、駱賓王の詩題に用いられてゐる「艶情」が、類題意識をもつと認め得る唯一の有力な用例といふことになる。

駱賓王の右の用例以外に、唐代頃までの詩句中に、見える「艶情」をつぎに検討する。

「艶情」の、「あまり多くの例を見出しえない」ことは、小島博士（注13）、松浦氏（注14）ともに述べておられる。私の調査では、辞書類、左伝・史記・漢書等の史書、及び詩経、世説新語、文選、玉台新詠集、芸文類聚、樂府詩集、花間集、及び白氏文集、全唐詩をも通覧して、駱賓王以外の「艶情」の用例は、歐陽炯の詞と寒山の詩、及び樂府詩集に各一例ずつしか見出すことができなかった。

まず、寒山詩集には次のように出ている。

君看素裡花 君看よ、素裡の花

能得幾時好 能く幾時の好をか得ん

今日畏人攀 今日は人の攀らんことを畏れ

明朝待誰掃 明朝は誰が掃くを待たん

可憐嬌艷情 可愛く嬌艶の情

年多転成老 年多くして転た老と成る

将世比於花 世を將つて花に比す

紅顔豈長保 紅顔豈に長く保たんや

(全唐詩 第二函第一冊所収 読み下し文は入矢義高先生が注された「中国詩人選集 5」による)

これは、人生を、葉裡の花のあでやかで愛くるしい花の

風情に喩え、花の如き紅顔もいつまでもながらえるもの

でないことを詠じた詩である。この詩句中の「可憐嬌艶

艷情、年多転成老」は、「年年歳歳花相似、歳歳年年

人不同」と吟じた劉希夷の「代悲白頭翁」の詩句

寄言全盛紅顔子、必儻半死白頭翁

此翁白頭真可憐、伊昔紅顔美少年

の句を連想させる。白頭吟の女性版ともいえようか。こ

こにおける「嬌艶情」の「情」は、「心」とか「思い」

という心情を現わす解釈は成立し得ず、「姿」「情態」

「風情」に相当する。

女冠子

薄妝桃 臉 薄き妝、桃の如き顔

滿面縱橫花 滿面は縦横に花の鬪なり

艷 情 多 何とあでやかさに満ちていることか

綬帶盤金 綬帶は金縷をめぐらし

袿 裙透碧羅 袿き裙は碧き羅に透ける

含羞眉作 羞らいを含んで眉をひそめ

微語笑相和 微語し互いにほほ笑みかわしてい

不会頻偷眼 頻りに偷み見するといわさも知

意 如 何 いったい何を考えているのだから

(全唐詩 第二函 第十四所収 読み下し兼意解は

筆者の試案)

この例も、成人式をあげたばかりの美人の、花の如きあ

でやかな美しさ、これを「盛情多」というのであろう。

とすると、この「盛情」も、寒山の例と同じく、あでや

かな女性の姿態、風情を意味する。

最後に、楽府詩集卷四十六所収、華山幾二十五首中の

一首には、次のように見えている。

著処多遇 著処でつらい目に遇うことが多く

的的往年少 まさまさと青春の日は残り少ない

艶情何能多 あでやかな美しさはどうして多か

(読み下し兼意解は筆者の試案)

古今楽録によれば、「華山幾」は、華山の君と女子との

悲恋の伝説をふまえた、児女の懊惱恋情を表現した詩が

収められている。右は、その中の一首であり、この「艶

情」の「情」も、前の二例と同じく、姿態、風情の意味

に解すべきであろう。

以上の、楽府・詞に出てくる「艶情」の用法は、中国

漢詩文の詞句中に頻出する「一般用語としての艶」(注15)

の用法——「華艶」・「艶姪」等——と全く同一と考え

られる(注16)。ここで注目すべきことは、右の用例か

ら、「艶情」という用語は、民間に伝承されて来た読み

人知らず的な詩に用いられており、かなりくだけた内容

の詩にしか見えないということである。歐陽炯・寒山と

もに唐末の詩人で、寒山は、はたして実在した人か不明

である。楽府の例は、六朝末から唐初期頃に成立してい

たと考えられる。つまり、唐初期頃までの「艶情」の用

例は、楽府詩集と賈至王の詩との二例しか見当らぬわけ

である。寒山の例は、「嬌艶情」とあり、「艶情」とは

別に考えれば、欧陽炯の「盛情多」は楽府詩集の「艶情

何能多」を真似た言い方と見られるから、「艶情」の源

は楽府詩集にまで遡り得ることになる。そして、作者の

明らかな用例は、賈至王にはじまることになる。しかも、

この賈至王の類題の用法は、他の「艶情」の用法に比べ

て、むしろ例外的な存在であろう。

思うに、「艶情」という言葉は、本来、オーソドック

スな詩文中に取り入れられるような文学語ではなかつた。

ところが、南朝の、いわゆる艶詩流行を契機として、「艶

」の字を用いた語句も詩句中に頻りに用いられるようにな

つた。と同時に、楽府等の、民間に伝承されていた読み

人知らず的な詩句中に、「艶情」という語もたまたま現

われてきた。けれども、これはまだ、本格的な詩語とは

なりきつていない未成熟な語句であつた。

というのは、「艶」は、他の語と結びついて「艶色」

「艶質」、「艶骨」(骨は質と殆んど同義)などとは言

うが（以上三例は、ともに白氏文集にも見える）、「艶」が心情を現わす語（「情」、「心」、「懐」、「想」etc）と結びついて用いられることはないからである。白氏文集に見える「艶」の熟語の例を以下に列挙してみよう。

艶歌、艶妓、艶質、艶韻、艶詞、艶色、艶声、艶陽、艶骨、艶賦、艶遊、艶天、艶曳、艶動、艶聴、艶妻、

以上となる。この傾向は、他の詩集（文選、玉台新詠集等）についても同様である。そして、「情」と結びついた数少ない「艶情」の用例についても、これらの場合の「情」の意味は、前述のごとく「心情」ではなかつた。「情」は女性の姿態、風情の意味であつた。おそらく、昭賢王の場合も、そのつもりで用いたのであろう。それにしても、そういう未成熟な語句を、類題意識を持つた文学語として詩題中に堂々と用いたのは、昭賢王の艶情篇前後の詩をみると、彼はかなり「艶情の詩」を志向しているように私には思われるのであるが、そうした昭賢王の個性に因るところが多からう。

唐代までの、中国文学作品に見える「艶情」の用例の検討は以上で終る。

四

本節では、文華秀麗集の「艶情」の用法を検討する。

まず、実際に、文華秀麗集の「艶情」の中に収められている詩に目を向けよう。

文華秀麗集には、次の十一篇の詩が「艶情」の部に収められている。ついでに、同じく類題別に編纂してある芸文類聚人部の類題と、文華秀麗集艶情部の詩との関係も図示しておく。

文華秀麗集「艶情」部の内容		芸文類聚人部の該当類題
1 奉和春閨怨	菅原清公	閨情
2 奉和春閨怨	朝野鹿取	"
3 奉和春情怨	巨勢識人	"
4 奉和春情	巨勢識人	"
5 和伴姪秋夜閨情	巨勢識人	"
6 長門怨	嵯峨天皇	怨
7 奉和長門怨	巨勢識人	"
8 姪好怨	嵯峨天皇	"
9 奉和姪好怨	巨勢識人	"
10 奉和姪好怨	桑原腹赤	"
11 奉和聽簾衣	桑原腹赤	愁

以上の詩には、かつて「妖艶二八の時」には「灼々たる容華、桃李の姿」を誇つた美人が、一たび良夫にまみえらるや、詞筵、朝には琅玕の食を共にし、錦褥、夜には

翡翠の帷を同じくする」のもつかの間、夫は遠征のため遠い辺境に出向いて生き別れになり、或いは新しい恋人が出来たに於ては、反転悶悶の情が、全篇を包んでいる。

これと類似する内容の詩集を、唐代までの中国の漢詩集に求めると、六朝梁の簡文帝、蕭綱が徐陵に命じて編させた玉台新詠集があげられる。

次に、同じく類似する内容の詩を文選に求めると、形式的には、賦の下位分類としての「情」に近い関係に立つ。しかし、それは賦についての例であつて、小島博士（注17）も言及されるごとく、文華秀麗集の詩の部門の名称としては、内容的にふさわしくない。むしろ、内容的には、詩の中の「楽府」・「雜歌」・「雜詩」・「雜擬」等の詩の方に、ふさわしい詩が散見する。それらの詩の題名と作者を次に示そう。

- 文選詩丙 詠懐
- 阮嗣宗 詠懐十七首の中の
- 1 第二首 玉台 卷二 阮籍 詠懐詩二首  
 (一) 二妃遊江濱
- 同 哀傷

- 2 曹子建 七哀詩一首 玉台 卷二 曹植 雜詩五首  
 贈答二
- 同 陸士衡 為顧彦先贈婦二首の中の
- 3 第二首 玉台 卷三 陸機 為顧彦先贈婦  
 (往返)二首 (一) 東南有思婦  
 同詩 贈答三
- 同 陸士竜 為顧彦先贈婦二首
- 4 第一首 玉台 卷三 陸雲 為顧彦先贈婦  
 往返四首 (一) 悠悠有行
- 5 第二首 玉台 卷三 陸雲 為顧彦先贈婦  
 往返四首 (四) 浮海難 為水
- 同 詩戊 樂府上
- 6 古樂府三首
- 6 第一首 飲馬長城窟行 玉台 卷二 蔡文姬  
 飲馬長城窟行一首
- 7 第二首 傷歌行 玉台 卷二 魏明帝 樂府詩一  
 首 (一) 昭昭素明月 文選には香粉賦とある
- 8 班婕妤 怨歌行一首 玉台 卷一 班婕妤  
 怨詩一首
- 魏文帝 樂府二首の中の
- 9 第一首 燕歌行 玉台 卷九 魏文帝 樂府燕歌行  
 二首 (一) 秋風蕭瑟 天氣涼
- 曹子建 樂府四首の中の

- 10 第二首 美女篇 玉台卷二 曹植  
同 案府下 美女篇
- 11 鮑明遠 案府八首の中の  
第六首 白頭吟 玉台卷四 鮑照 雜詩九首  
同 雜歌 (一)擬案府白頭吟
- 12 陸韓卿 中山王孺子妾歌一首 玉台卷四 陸厥  
同 詩已 雜詩上 中山王孺子妾歌
- 古詩十九首の中の
- 13 第一首 玉台卷一 枚乘 雜詩九首  
(一)行行重行行
- 14 第二首 玉台卷一 枚乘 雜詩九首  
(五)青青河畔草
- 15 第五首 玉台卷一 枚乘 雜詩九首  
(一)西北有高楼
- 16 第六首 玉台卷一 枚乘 雜詩九首  
(四)涉江採芙蓉
- 17 第八首 玉台卷一 古詩八首 (注18)  
(三)冉冉孤生竹
- 18 第九首 (庭中有奇樹) 玉台卷一 枚乘 雜  
第十首 玉台卷一 枚乘 雜詩九首  
(一)迢迢牽牛星
- 19 第十二首 玉台卷一 枚乘 雜詩九首  
(二)東城高且長
- 20 曹子建 雜詩六首の中の  
第三首 玉台卷一 曹植 雜詩五首  
(一)西北有織婦
- 26 第四首 玉台卷一 曹植 雜詩五首  
(五)南國有佳人
- 27 曹子建 情詩一首 玉台卷一 曹植 雜詩五首  
(三)微陰翳陽景
- 28 張茂先 情詩二首  
第一首 玉台卷一 張華 情詩五首  
(三)清風動雜簾
- 29 第二首 玉台卷一 張華 情詩五首  
(五)游目四郎外
- 30 張景陽 雜詩十首の中の  
第一首 玉台卷三 張協 雜詩一首
- 31 謝惠連 壽衣一首 玉台卷三 謝惠連 雜詩三首 (一) 贈衣

- 32 王景玄 雜詩一首 玉台卷二 王微 雜詩二首  
(一)思婦臨高台
- 33 謝玄暉 和王主簿怨情一首 玉台卷四 謝朓  
同 王主簿怨情
- 34 沈休文 應王中丞思遠詠月一首 雜詩五首 (三) 詠月  
同 詩庚 雜詩上
- 陸士衡 擬古詩十二首の中の
- 35 第四首 擬涉江采芙蓉 玉台卷三 陸機 擬古七首  
(七)擬涉江采芙蓉
- 36 第五首 擬青青河畔草 玉台卷三 陸機 擬古七首  
(五)擬青青河畔草
- 37 第七首 擬蘭若生朝陽 玉台卷三 陸機 擬古七首  
(三)擬蘭若生朝陽
- 38 第十一首 擬庭中有奇樹 玉台卷三 陸機 擬古七首  
(一)擬庭中有奇樹
- 同 雜擬下
- 劉休文 擬古詩二首
- 39 第一首 擬行行重行行 玉台卷二 劉勰 雜詩五首  
(一)代行行重行行
- 40 第二首 擬明月何皎皎 玉台卷二 劉勰 雜詩五首  
(二)代明月何皎皎
- 江文通 雜體詩三十首の中の
- 41 第一首 古離別 玉台卷五 江淹 古體四首  
(一)古離別
- 第三首 班婕妤 詠扇 玉台卷五 江淹 古體四首  
(二)班婕妤 詠扇
- 第十首 張司空 雜情華 玉台卷五 江淹 古體四首  
(三)張司空 雜情華

以上の詩は、いずれも、文華秀麗集の「艶情」部門の詩と類似する内容の詩と判断した。文選所収の詩のすべてである。ところが右の割注に示すように、これらの文選の詩は、すべて玉台新詠集にも所収されている。便宜上、これらの詩を第一群の詩と呼ぶことにする。

第一群の詩中、文華秀麗集の「艶情」部と最も密接な関係にあると思われるのは、「詩已、雜詩上」に入っている曹子建の「情詩一首」(通し番号27)及び、張茂先の「情詩二首」(同28、29)。(玉台新詠集には、割注に示すごとく、情詩五首がある)である。これ等に、文選には収められていないが、玉台新詠集卷一の徐幹の「情詩一首」をもあわせると、当時、計七首の「情詩」が見える。このうち、張茂先の情詩五首中の第二首「明月暉清景」(これは男子が美人を思うことを述べた詩で、思う主体は男性だ。後述のごとく、これは第二群の詩に属す)を除いて、他の六首は、第一群の詩と同類である。これらの「情詩」の存在は、当時、「情詩」という詩題が詩題として定着しつつあったこと、及び、「情詩」の内容は、男子が美人を思う場合よりも美人が夫、恋人を思う場合に傾いていたことを、語っているのではなから

うか。また、この現象は、玉台新詠集そのものの性格に端的にあらわれていよう。鈴木虎雄博士が玉台新詠集について、「ともかく此書は漢魏以来宋までの情詩を集めたものであるが、その中心となつたものは齊梁時代の世相を背景として、當時の文学的技術によつて描きだしたもののなのである。」「本書は周以後、漢代から六朝までの女性感情が女性自身によつてのべられていた資料が豊富に備はつてゐるのである。」（注19）と解説しておられるように。

文選中には、右の第一群の詩以外にも、玉台新詠集に重出する詩がある。それ等を次に示そう。

文選詩丙 詠懷

- 1 阮嗣宗 詠懷十七首の中の
- 第四首 玉台 卷二 阮籍 詠懷詩二首
- 哀傷

潘安仁 悼亡詩三首の中の

- 2 第一首 玉台 卷二 潘岳 悼亡詩二首
- (一) 荏苒冬春樹
- 3 第二首 玉台 卷二 潘岳 悼亡詩二首
- (二) 暖皎窗中月

同 雜擬下

- 江文通 雜體詩三十首の中の
- 12 第三十首 休上人 別怨 玉台 卷五 江淹 古体 四首 (四) 休上人 怨別

以上となる。便宜上、これ等の詩を第二群の詩と呼ぶ。第二群の詩には、全般的に、男性が亡き妻を、或いは故郷の妻または恋人を、恋うる情がうたわれている（注20）。一般的に、玉台新詠集の情詩は、恋する主体の側から分ければ、右のごとく、女性或いは男性、または男女相互の思いから分類され得よう。がしかし、集全体の主旨は、男性或いは女性の、情のあらゆる側面を通して、美人のさまざまな姿態を描き、美を追求しようとしている。これは、中国漢詩集中最も唯美的な詩の集まりである。文華秀麗集は、文選中のこの玉台新詠集に重出する詩のうちで、第一群の詩——女性を主体とした愛情の詩——と類似の内容の詩を集めて「艶情」という類題を設けた。そしてこの第一群の詩は、第三節に述べた昭寶王の「情、代郭氏答盧昭郡」詩と同質の内容でもある。ことに、文華秀麗集の類題「艶情」のもつ意味内容を探る重要な鍵があるように思われる。

つまり、文華秀麗集の「艶情」の「情」は、「心情」

同 贈答二

- 陸士衡 為顧彦先贈婦二首の中の
- 4 第一首 玉台 卷三 陸機 為顧彦先贈婦 (往返) 二首 (一) 許家遠行遊

同 詩已 雜詩上

- 蘇子卿 詩四首の中の
- 5 第三首 玉台 卷一 蘇武 留別妻 一首
- 6 張平子 四愁詩四首 并序 玉台 卷九 張衡 四愁詩四首 一思 二思 三思 四思

同 雜詩下

- 7 謝惠連 七月七日夜詠牛女 一首 玉台 卷三 雜詩三首 (一) 七月七日詠牛女
- 8 鮑明遠 既月城西門解中 一首 玉台 卷四 鮑照 既月城西門 (解中)

同 詩庚 雜擬上

- 陸士衡 擬古詩十二首
- 9 第三首 擬 迢迢牽牛星 玉台 卷二 陸機 擬古七首 (四) 擬 迢迢牽牛星
- 10 第九首 擬 東城一何高 玉台 卷二 陸機 擬古七首 (一) 擬 東城高且長
- 11 第十首 擬 西北有高樓 玉台 卷二 陸機 擬古七首 (二) 擬 西北有高樓

の意味で用いられているとしか考えられない。

何とならば、もし、第三節に見た中国漢詩文の詩句中に一般用語として用いられている「艶情」の解釈と同様に、「情」を姿態・情態・風情等の意味に解釈すると、文華秀麗集の艶情部の詩は、美人の艶なる姿態をうたつた詩ということになる。ところが、実際の艶情部の詩は、詩中の美人がいかにあでやかな姿態を持つてゐるかを説んだ詩ではないからである。

艶情部の詩は、美人が、離別した夫を、恋人を、いかに恋慕しているかを、遊戯的な気分をも含んで男性の詩人が代作したものである。すると、これは、南朝以来の一般の「情詩」に連なるものといえる。つまり、中国の「情詩」中の、艶なる女性を主体とした愛情の詩が、文華秀麗集にいう「艶情の詩」であると解釈すべきだと思われる。また、文華秀麗集の編者等は、そういう意図を持つて「艶情」という類題を設けたのであろう。

この文華秀麗集に見える「艶情の詩」は、我が国の勅撰和歌集においては、恋の部に相当する。しかし、一般に、我が国の勅撰和歌集の恋の部には、恋愛の初期から中期、後期、終末へと、男女相互の恋愛の経過をよんだ歌が順を追つて配列されているのが立てまえであるのに、

文華秀麗集の艶情部の詩には、恋愛の後期、それも、恋人と別れた後の女性感情だけがとりあげられている。このことは、「中国の恋愛詩は、一部の民歌の例を除いて、すべて不幸な恋のみを詠じ、愛の讃歌はないといつていいこと。恋愛のみに限らず、一般的に悲哀のみがもつぱら詩にうたわれ、生の悦びがうたわれることは殆んどない」という奇妙な詩の伝統がある（入矢先生の御教示による）ことに帰因しよう。このことについては、我が国の勅撰和歌集についても似た傾向があるといえる。がしかし、右の艶情部の詩の例は、和歌的発想から恋愛詩を考へるにはあまりにも不自然であろう。したがって、右のように解釈せざるを得まい。

以上をもつて、文華秀麗集の類題「艶情」と、中国の一般用語に見える「艶情」との間に、<sup>△</sup>ずれがあることが認められた。それは文華秀麗集の艶情部の詩は、女性の姿態よりも心の描写に傾いている点で、中国の先例（楽府、歐陽炯、寒山）に見える「艶情」の用法とは異なつてくるからである。

この<sup>△</sup>ずれをもたらしつてまで、「艶情」という類題を設けようとしたのは、外でもない。「艶情」の直接の典故と考えられる賈賓王の「閨情」、代郭氏答盧照鄰<sup>△</sup>詩に

彼等は賈賓王の用例だけでは「艶」の用法の正しい理解が出来なかつたからであり、また、彼等の頭の中には、先例の類題としての「閨情」のイメージが強かつたので、「一情」という形を真似たからであろう。

したがって、文華秀麗集の「艶情」は、芸文類聚の「閨情」——「閨中の情」——と全く同じ意味内容をもつてくることになる。芸文類聚人部には「閨情」、「怨」（「閨怨」——「閨中の怨」——の略）、「愁」（「閨愁」——「閨中の愁」——の略）と分けて分類されているが、文華秀麗集では、本節のはじめに表示した如く、それ等三者をもひつくるめて「艶情」という類題を設けたにすぎない。

なお、松浦友久氏は、文華秀麗集の唯美的傾向を次のように説明しておられる（注22）。

「文華秀麗集」の唯美的傾向は、類題に「艶情」の部を立てたところにも見出せる。小島博士の指摘されたごとく、中国先行作品の類題には「艶情」の語が見当たらない。「文選」では、類題としてこれに相当するものは全くなく、賦の下位分類としての「情」や詩の題名としての「情詩」があるだけである。「芸文類聚」の「閨情」の部は、類題として立てら

よる。「閨情」という語句を詩題に用いたこの詩が、南朝以来の情詩と同質の内容のものであつたからである（注23）。もし、この詩が同質の内容を持ち合わせていないとしたら、たとえ詩題中に「艶情」という語句が用いられていても、おそらくそこに「艶情」という類題の典故を求めるとは出来ないであろう。

おそらく、和歌に見える恋（相聞）歌にヒントを得た文華秀麗集の編者等は、南朝以来の情詩をよむことによつて、そのような詩を一括して一類題を立てようとしたのであろう。彼等の頭の中には、芸文類聚の「閨情」という類題がまず第一に浮んでいたのであろう。が同時に、彼等の志向する内容の詩と同質の内容の詩を、賈賓王の詩に見いだした。彼等は、その詩題中に「閨情」という語句をみつけ「閨情」を「艶情」に代えてみた。

つまり、彼等は、南朝以来の情詩を志向したがゆえに前掲の十一篇の詩を一旦まとめて一類題を立てたのであり、類題を「艶情」ときめたのは賈賓王の詩を契機とする。「艶」は心情を現わす語と共に結びつかないという中国漢文に見える通念を破つてまで「艶」が心情を現わす語と<sup>△</sup>つひつひ結びつてしまつたのは、

れているだけに「文華秀麗集」への影響は大きかつたと思はれるが、それでも「閨情」と「艶情」の間には感覚的にながら相違がある。いつたい、「艶情」という用語そのものがかなり例の少ない表現である。「文選」や「世説新語」唐代類書の例をみても、類題としてはもちろん、詩文中の語句としてもあまり用いられていない（小島博士は賈賓王の「艶情」、代郭氏答盧照鄰の例をあげられた。）したがって、そのような状態にある言葉を詩集における類題の名称に用いるということは、一種の文芸的創作とも言うべきものであり、「閨情」でも「怨」でも「愁」でもなく、（いずれも「芸文類聚」人部の類題で、「文華秀麗集」の「艶情」部と同質の詩を収める）「艶情」を良しとした編者たちの感覚は、選択の結果は別として、彼等がどのような性格をこの詩集に盛りこもうとしたかを、端的に表わしているといえよう。

文華秀麗集の編者等が、どのような性格をこの詩集に盛りこもうとしたかという氏の結論には同感であるが、私はむしろ、「艶情」と「閨情」との両詩の間に感覚的な差異を認めず「閨情」の広義解釈——閨中の恋情、怨情、愁情等を統一的に「閨中の情」とする解釈——に、文華秀麗集にいう「艶情」の意味内容を求めたい。そして、



その「艶情」は、文華秀麗集の編者等の一種の文芸的創作とまでいうよりも、小島博士も言われる如く（注23）、駱賓王の詩に直接の出典を求めたい。（理由は本節に述べたつもりである）そして、文選第一群の詩、玉台新詠集に収められている大部分の詩と類似の内容の詩を集めて、それ等に「類題」を設けている（類題名は「艶情」でも「閨情」でもかまわない）ところに、文華秀麗集が、玉台の唯美的傾向をいかに志向したかを理解したい。ということ、文華秀麗集の「艶情」の直接の出典たる駱賓王自身の場合についても、「玉台的な唯美的傾向」を継承し、推しすすめたということになる。そこで、文華秀麗集の「艶情」は、彼を直接に受けながら、間接には、玉台の美の世界をも志向したと言えよう。

五

以上をもつて、中国漢詩文の語句中に用いられている一般用語としての「艶情」と、文華秀麗集の類題として用いられている詩学上の「艶情」との、意味内容の微妙な相異点を指摘した。おそらく、後者は前者から、駱賓王の詩題を媒介として輸入されたものと思う。文華秀麗集艶情部には、奇しくも離別した女性の「怨情」「恋情」が詠まれているがゆえに、「艶」は心情を現わす語と結

びついたことになり、これはやがて、「艶」と「怨」、「艶」と「恋」の結びつき——犬塚氏（注24）のいわれる、「満たされない愛情」、「離別」を契機とする「艶」が平安以降の我が国の文学作品にあらわれる可能性が理解されよう。ここに、「艶」という語が、平安文学に変容されて入ってきた一過程を見いだすものである。

注1 「「文華秀麗集」考」（漢文学研究 早稲田大学創立 特集 日本漢文学 10号 昭37・10）

注2 「勅撰三集研究覚書」（国語と国文学 特集 日本漢文学の諸問題 34巻10号 昭32・10）

注3 「「白氏」以前」（国語国文 30巻4号 昭36・4）

注4 岡田正之博士著「日本漢文学史」第二章「勅撰の三集」

注5 注3と同じ

注6 艶詩とは、詩の表現形態についての詩学上の名称である。

注7 注3と同じ

注8 注15参照

注9 注16参照

注10 清の沈德潜の著わした古詩源の例言に「隋煬帝臨情篇什」と見える。

注11 中華書局版駱臨海集箋注の附録に収められている諸作品の配列順、及び、それらの作者名の書かれ方で判断した。

注12 中華書局版臨海集箋注の附録に収められている。

注13 注3と同じ

注14 注1と同じ

注15 便宜上、詩文を対象としていつている（たとえば、この詩は華艶であるといっているような）「艶」を「詩学上の艶」と呼び、詩文を対象とするのではなく、一般的に花・美人等について艶いつたりしている場合の艶を「一般用語としての艶」と呼ぶ。

注16 中国漢詩文中の、詩学・一般用語としての「艶」の用法の概略は、昭和三十七年度春の名古屋大学国語国文学会総会の席で、口頭で「艶の源流」と題して発表した。その詳細は他の機会に譲る。

注17 注3と同じ

注18 劉焯は「文心雕章」卷二、明詩篇に、後漢の「儔

殺之詞」と称す。

注19 ともに、岩波文庫 玉台新詠集 上の解説による。

注20 中には、男女相互に思う情詩もある。

注21 小島博士は前掲の論文において、両者の詩中に、同類の語句を指摘しておられる。

注22 注1と同じ

注23 小島博士は、前掲論文で次のように述べておられる。

この（駱賓王の、筆者注）艶情の詩は、洛陽の女人の離別の怨を述べ、以下に述べる文華秀麗集の詩に類句が多い。「艶情」の部門は、文選の「情」のほかに、芸文類聚などの「閨情」、更に直接の出典として駱賓王の例を綜合して案出されたものとみて然るべきであらう。

また氏は、日本古典文学大系69の文華秀麗集の補注において、この「艶情」を次のように説明しておられる。

艶情 あでやかな閨情の意で、艶色をもつ女人が、ねやの中で思い、怨み、或いはひとりねを嘆く情をいう。

注24 犬塚且氏(平安朝における「鏡」の考察)(芸林  
7巻3号 昭五・6)

おわりに、拙稿を作成するにあたり、終始懇切丁寧な御  
指導と御助言を賜りました、松村博司先生、入矢義高  
先生、並びに多くの諸先学に対しまして、厚く感謝いた  
します。

〔名古屋市立中央高校教諭〕

## 伊勢物語の新解釈の試み

### 1 伊勢物語の研究(二) 1

井上寿彦

本誌第十五号(昭和三九・十一)において伊勢物語の  
構成について私見を発表した。

それをきわめて簡単に要約すれば、伊勢物語は恋に関  
する小話を、その時間的経過を追って配列しているの  
はないか、という推論であった。そしてその配列の中  
は、ある章段について現行の解釈を再考し、新しい解釈  
が試みられるという問題提起をしておいたのである。

ここでは、伊勢物語の、第二段・第十八段および第二  
十段について考えるところを述べてみたいと思う。

#### (一)

#### 二

むかし、おとこ有(り)けり。ならの京は離れ、この  
京は人の家まださだまらざりける時に、西の京に女あり  
けり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたち

よりは心なんまさりたりける。ひとりのみもあらざりけ  
らし。それをかのみめ男、うち物語らひて、帰り来て、  
いかが思ひけん、時はやよひのついでに、雨そをふるに  
遣りける

起きもせず寝もせず夜をあかしては春の物とてながめ  
暮らしつ

この段の解釈を今池田亀鑑博士著「伊勢物語精講」  
(学燈社)によつて引用すると、

#### 二段

むかし、男がいた。みやこは奈良から平安京に移り、  
このみやこがまだ人家もまばらに、よくととのつていな  
かつた頃、西の京に女がすんでいた。その女は世間にあ  
りふれた女より一段と勝れた人であつた。容貌も美しか  
つたが、それよりも心の方がすぐれていたのだつた。独  
身を通していたわけではなかつたらしい。その人に、例